



## 可能性をひろく

— 巡回保育相談の現場に学んで —

鈴木素麗香

a. 自分と他者の物事への感じ方は、  
同じである

そんなはずはない、ということ、誰もが知っている。たとえ客観的に同じ物事に遭遇した（と仮定する）としても。

人が他者の思いや意図を推測するとき、「相手だったらきつと、こう思うのではないか」もしくは「私が相手の立場だったら、こう思うだろう」と考える過程

を経る。もちろん他者の気持ちをすべて知ることとはできないが、他者とのやりとり・関係の中では、わからないなりに予測をしかかわることが必要となる。つまり、それぞれ違うところから、人と人とのかわりは始まるのだ。

b. 自分と他者の物事への感じ方は、  
それぞれ異なるものである

言葉にしてもなお当然の事実であり、常識的な価値

観であるといえよう。しかしながら実際、すべての人がいつの場合も、このことに意識的であるとは限らない。当たり前のことだからこそ、多くの場合、非自覚的に忘れられがちであることもまた、事実なのではないか。

保育は、援助的な行為であるといわれる。保育者が、子どもの行為の意味・意図・気持ちなどを推測することで、その子を理解し、育ちへの願いをもってかかわっていく保育もまた、人と人とのかわりである。そして、保育者とその子が『それぞれ違う』からこそ、まずは理解（しようとする）が求められるのだろう。

保育の中で子どもとかわる際に、『子どもを、一人の個として見る』必要があるといわれることがある。では、個として見るとは、いったいどういうことか。

その子独自の個性をもった存在であると認めることという、個性の受容に還元される考え方もあるのだら

う。しかしながら、もう一つ踏み込んでいうとすれば、先に挙げたように、子ども一人ひとりが（大人と子どもの間に違いがあるという以前に）物事への感じ方の違う存在なのだということ、それをかわる大人が意識化すること、ともいえるのではないか。『物事への感じ方』というフレーズはもの見方や体験のとりえ方、目的や意図、思い、興味関心……など、さまざまに置き換えられる。解釈の可能性は幾らでもあり得る。逆に言えば、そのような意識化のされ方が保育では求められるのではないだろうか。

違うということに着目すると、次のようにもいえるだろう。

c. 自分が相手への言動に込めた意味と、  
相手にとって体験されたこととは、  
同じではない

平たく言えば、自分のつもりと相手のとらえ方は、違って当然ということである。これも前段同様、誰も

が納得できる事実でありながら意識されにくい。

自分はこう伝えたつもり(はず)なのだから、相手もそう受け取ってくれたはずだ、という感覚・手応えを、互いに信頼してやりとりは進められていくのであるが、それに伴って前記cのように考える客観性もまた求められよう。「もしかしたら、こちらの意図と違ったように相手にはとらえられているかもしれない」と推測する冷静さもまた、相手のとらえ方・相手にとってはどういう体験となっているのかを推測し、やりとりを進めるための一つの手掛かりを生むように思われる。

このこともまた、保育の場面に置き換えて考えることができる。保育者が伝えようとしたメッセージと、それが子どもにとってどういう体験になったのかということは、必ずしも同じではない(互いに逆もしかり)。「自分はこういうつもりだったのに、どうしてわかってくれないの？」という気持ちの行き違いは、人間関係ではよくあることである。その行き違いのために、相手に理解されないことによる不満をもったり、思い

は果たして通じているのかと不安になることもあるだろう。通常、大人同士であればこのようなとき、話し合いの機会をもつことで行き違いが解消されたり、理解を深めることができる。しかしながら、相手が小さな子どもである場合は事情が違い、容易ではないことも多い。その子どもが、保育の中で人とかかわりが難しい(とされる)ような場合には、なおさらである。

「Aくんが言うことを聞かないので困っている。今日はそういうところを見てもらいたい。場面の切り替えのときに、Aくんには言葉かけだけで動いてほしいので、どうすれば素直に聞いてくれるか知りた

い」。

巡回保育相談員<sup>註</sup>として訪れた保育園で、保育者からこのように言われることがある。確かに論理的におかしいところはなく、先生方が困っておられるのは事実であろうから、もつともな訴えに思えるのだが、どことなく違和感をぬぐいきれない……何かひっかかる。

このようなとき、私はいつも複雑な思いを抱いていた。

五歳児のQくん（後にアスペルガー症候群との診断有）も、そのように語られる子どもであった。

入園二か月後（登園したのは二十日ほど）。戸外自由遊び時間が終わり、全クラスが片づけを終えてそれぞれの部屋に戻り全体活動が始まろうとしているころ、Qくんはそれまで自ら一列につないでいたBブロック（車輪が付いた、細長い乗り物のような形。以下、Bブロック車と表記する。）を、誰もいなくなつた長いテラスでひたすら何往復も走らせる。急に立ち上がって今度は自分が何往復ものすごい速さで走る。そのうちに汗だくで息を切らしながら床に寝そべり、またひたすらBブロック車を走らせる。そのまま約三十分がたち、給食の時間に差しかかったころ、部屋の中からP先生（Qくん担当加配）が出てこられ、声をかけた。

P 床に寝そべっているQの横にしゃがんで、  
「い、飯食べないの？」

Q P先生の話も終わらないうちに早口で

「イヤッ」とBブロック車を走らせる

P 「もうご飯の時間だよ？」

Q 素早く「イヤッ」

P 「Qくん……」と

Q のつかんでいるBブロック車に手を伸ばす

Q すかさず（奇声でP先生を威嚇するように）

「キヤーツ」「イヤッ」

P 伸ばした手を引っ込めて

「まだ電車したいの？」

Q 無言でBブロック車に視線を向けながら、動

かし続ける

P 黙って部屋に戻る

Q さらにBブロック車を動かし続ける

このようなやりとりが時間を置いて四度続いたころ、クラスの子どもたちと先生は食事を始めていた。

Qくんはそれでも、やめない（似たようなことが毎日のように、園生活のどこかで繰り返されているとのこと）。

以上のようなことが「問題」とされる場合、経験的な物言いで恐縮だが、巡回保育相談のカンファレンスは「なぜこの子は言うことをきかないのか？ 指示に従わないのか？ ワガママはいけないということ、どうしたらわかってくれるか？ このようなとき、どう言葉かけしたら素直に動いてくれるか？」という議論に滞留しやすい。また「ある程度はこの子の気持ちを受け止めてかかわりたい」という意見に皆がうなずきながらも「では、どこまで気持ちを受け入れて、どこからはこちらの言うことに応じてもらうのがよいのか？」という点で行き詰ることもある。突破口の開けない議論への責任感と先に挙げた違和感とが渦巻く中で、この滞留の根にあるものは何なのだろうと、私自身も考えるようになった。

そのような折に巡ってきた、Qくんのカンファレンス。そこでも議論はさながら滞留の様相を呈していたが、ふと、私自身が「物事に関する自分の感じ方と、他者の感じ方とは、同じではない」（前掲b）・「自分

が相手への言動に込めた意味と、相手にとって体験されたこととは、同じではない」（前掲c）はずだと思いついたのである。たとえば、私たちは、P先生がQくんに言葉かけで何かを伝えたとき、それを彼は完全に理解しているものと思いついていないのか。果たして本当にそうだろうか。

振り返ると、前述のような場面でP先生のようなお立場から「この子が言うことをきかない」と語られるとき、暗黙のうちに「自分はQくんに説明し行動を促した。（聴覚障害のない）Qくんは聞いているのに、やろうとしない」。つまり「Qくんは聞いたことを理解していて、できるのに、やらない」という前提に立ってしまっていることに気づく。しかし、さらに先の事実cの解釈を拡大し『自分が相手への言動に込めた意味と、相手にとって体験されたこととは、同じではない』ということヒントに考えてみると、P先生がQくんに指示をし、それに対してQくんが「イヤッ」と反応したからといって、Qくんがこちらの意図したと

おりに聞き届けて拒否しているとは限らないのである。

このように考えられたとき、この出来事（場面）の見え方が変わってくる。そしてカンファレンスでこのことを了解し合ったのをきっかけに、次のような議論が展開された。

●「Qくんが言うことを聞かない」というのではなく「Qくんが言うことを聞かない」ように見える」ととらえると、いらだつことなく「そのとき何があったのだろうか？」というように客観的に考えることができるのでは？

●前掲の場面に限らず別の場面も想定して……。本当にQくんは「求められていることはわかっていて、できるのにやらない」のか「わからないからやれない」のか「わかっている、できることなのになかなかやれない」のか？ 単なるわがままか？

●「わからない」ことはないのか？ 切り替えが悪

いのか？ もし、言われていることを理解できない、イメージできないということがあるのなら、どこにつまずきがあるのだろうか？ また、そのようなときQくんの気持ちはどのようなものだろうか？

●前掲の場面で、P先生としてはQくんに「遊ぶのをいったんやめて給食を食べに行こう」と伝えてあるつもりなのだろうが、Qくんにはそのニュアンスが伝わっているだろうか？ 毎回「まだ遊びたいの？」という言葉を最後に離れることから、結果的にまだ遊んでもよいと認められた体験になっている可能性はないか？

●日ごろから、給食の準備を言葉で促しても、しようとせず「イヤッ」と言うが、実際に食べ物や運ばれているのを見ると笑顔で準備を始めるとのこと。それも合わせて考えると、何かを指示されることで自体に敏感なのか？ それとも、実物を見ることでようやくイメージができるといった様子なのか？

●頻発するQくんの「イヤッ」を字面どおり一般的な「嫌」の意味（くしたくない）で受け取ってきただが、果たして毎回その意味でQくんは発しているのだろうか？ 気持ち伝える「イヤ」になっているか？ 保育者のかかりへの反射的な返答になっではないか？

●先生の話をお聞きという構えがQくんには見られないように感じられるが、そもそも、P先生との間に愛着関係はあるのか？ Qくんと接点がおかた、望ましくない行動をとめる、次の活動に促す、ことだけに終始していないか？（そのようにするときばかり来られても、話を聞く気にはならないのが当然ではないか？）

●今日のような場面で、ややもすると保育者は、Bブロック車を動かす様子を「遊び」であるとしながらもQくんの「こだわり」「なかなかやめない困った行動」として「やめさせるにはどうするか？」と考えがちであるが、Qくんにとってはどう

なのか。とらえようによっては、Qくんが楽しめる、自分からする遊び、とも考えられる。そうであるならば、保障されるべきものであるうし、他者との重要な接点ともなり得るのではないか？

●とはいえ、今はまだ入園間もない探索の時期・慣れていく時期でもあることを考慮しつつも、前掲の場面のようなとき、いけないものはいけなさと保育者が毅然としてかわることも必要ではないか？ そうすることでQくんにとって学習の機会になるのでは？ など。

このように、一つの出来事・やりとりが、（大人の意図とは別にして）その子にとってどういう体験になっている（と考えられる）か、という視点をもったことよって、より多角的な読み説き・議論が可能になったように思う。この読み取りによる子ども理解いかによっては、それを基にする保育者の判断・かわり方に直接影響するということを考えると、理解や

かかわりの可能性に広がり期待できる。

また、そこでの私たちの「読み」が正解か不正解かという議論は別としても、Qくんの例でいえば少なくとも、「Qくんは言われたことを聞かず身勝手に振舞う」といういら立ちから保育者自身が解放され、それによってQくんへ注がれるまなざしに変化する可能性はいうまでもないだろう。保育者のかかわりが変われば、Qくんが変わる・Qくんとの関係が変化する等の可能性も考えられ、このことが事態変容のきっかけになるように思われるのである。

巡回保育相談に期待されることとして、今なお「具體的な対応のしかた、具体的な言葉かけを」「AかBか、どちらか?」「(二者択一)」と求められることも多い中で、相談員として安直に回答することはできないが、今回の事例のように、日常忘れがちな事実を改めて意識化すること、それによって理解・かかわりの可能性にともに挑むことはできる。そうして議論がされていくこと自体が、巡回保育相談カンファレンスの

一つの役割であると思われるのではない。

(淑徳短期大学)

## 註

巡回保育相談の形態・内容等はそれぞれ実施されている自治体によりさまざまである。筆者が従事する自治体では、相談員のほかに園長・副園長・担当保育者および他クラスの保育者数名が同席しカンファレンスが行われている。内容に関しては「X市巡回保育相談実施要領」により次のように定められている。

(目的) この事業は、障害児及び特別な支援を必要とする児童に対して、巡回保育相談員による保育相談を実施し、保育園職員に児童の保育に関する相談・指導・援助を行うものとする。また、このことにより保育の円滑な運営及び向上を図るものとする。

(内容) ケースカンファレンスでは、保育士と巡回保育相談員との意見交換をとおして、子どもの行動の意味を確認し、その対処と関わりの検討をとおして新たな視点・取り組みを共通理解していく。